

歴史を伝える運動

～自分探しの旅～

この運動は、私たちが在日韓国人青年三世・四世世代が、「なぜ私たちが日本に住むようになったのか?」、自分たちの出自を自らの手で確かめるための運動である。約二年間全国を巡って聞き取ってきた貴重な一世の声を、次世代に伝えていくことが私たちに課せられた使命ともいえるだろう。たくさんのエピソードの中から、わたくしキャラバン隊長にとって感慨深かった二つの地域を紹介したい。

鹿児島県

「神風特攻隊」という言葉はあまりにも有名であるが、ここ鹿児島からも出撃していたことを知った。太平洋戦争末期、アメリカは沖縄の制空権を概ね支配したが、日本はアメリカに対抗するため飛行機もろとも肉弾となり敵艦に体当たりする陸軍特別攻撃隊員を出撃させた。その特攻隊員の中には朝鮮人も数人いた。



知覧特攻平和会館にて

のではなく、軍事訓練を受け、なおかつ志願した者を募ったようであるが、朝鮮人も日本国に忠誠を尽くすため兵に志願したようである。当時の皇民化教育の影響は絶大であったと感じた。「日の丸」に国家忠誓を誓う寄せ書きの遺品などからも伺えた。

特に出撃前の特攻隊員の、最後の晚餐模様を写した写真を見て、熱くこみ上げてくるものを感じた。何の罪もない人々が、「戦争」のために命をささげて何が残ったのかと思うと、虚しさという立ちを感じるとともに、二度と戦争という愚かな行為はしてはならないと実感した。

先述したが鹿児島県は、沖縄に一番近い県であり、また九州最南端という立地条件で、一世の方々の証言を聞くだけでも八力所も陸軍飛行場があった県である。その飛行場建設に多くの朝鮮人が徴用として来ていたそうである。またアメリカからの襲撃が激しく、何度か川に飛び込み襲撃を避けた証言もあった。

鹿児島ではとにかく特攻隊の印象があまりにも強かった。特攻



特攻隊の最後の晚餐

隊員の犠牲を風化させてはならないことと、世界平和・人権尊重を強く願った。

山口県

山口県では、かねてから取材を申し込まれていたTBSが随行することとなった。実は私のハラボジは山口県小野田市にあり、瓶工場に働いていたが、なぜ瓶工場に働いていたかわからないのである。

小野田市には、私が高校生の時に来て以来、実に十二年ぶりに訪問することとなった。瓶工場の周辺もすっかり様変わりしたが、昔の面影を思わず瓶工場跡地など

を訪ねると、鹿児島に続いて熱くこみ上げてくるものを感じた。ハラボジが戦前に働いていたここ小野田市も、私にとっては第二の故郷に思えたからである。ちなみにハラボジが働いていた瓶工場は影も形もなくなっていたので寂しかった。

小野田市に在住する一世の方から、なぜ小野田に朝鮮人が渡ってきたかを聞くと、小野田には十カ所にも及ぶ炭坑があり、朝鮮人の九割は炭坑で働いていた

そうである。続けて瓶工場について質問をすると、戦前には硫酸を作る工場があり、硫酸を詰める瓶を作っていたことを知った。だが朝鮮人が瓶を作っていたわけではなかった。瓶工場周辺の山から瓶制作の原料となる粘土がたくさん採取できたため、粘土を何度もこねる加工作業が必要であった。おそらくその仕事を私のハラボジもしていたのだろう。朝鮮人の九割が炭坑で働いていたのに、なぜ私のハラボ



ガラス瓶を制作していた登り窯

ジは瓶工場に働いていたのか。その質問をすると、小野田では全員といっていいほど炭坑で働くことが基本であったそうである。炭坑で働かなくなった人々が瓶工場に働くようになったと話していた。このような事実も後一・二年遅かったら、事実を知っている一世の方々がいなくなっていたかも知れない。そう思うと今運動は、まさに今しなければならぬ活動だと実感した。

キャラバンを終えて

約半年間かけて全国を巡回したキャラバンであったが、この半年間を振り返って私の感想を述べたいと思う。

今回の運動で一番実感したのは、「戦争」によって振り回された在日の悲劇である。太平洋戦争時「国家総動員法」により、日本人は徴兵に、朝鮮人は徴用で戦争に備えた。全国的に聞き取った一世の証言を自分なりに整理しても、多くの朝鮮人が徴用令で軍需工場設立や軍需物資輸送、炭坑などで働いており、「神風特攻隊」で亡くなった日本人兵士も、戦火に巻き込まれ亡くなった庶民もたくさんいる。多くの命が奪われたこと、それは「戦争」が産んだ悲劇である。

また一世は、太平洋戦争後も自分たちの祖国に帰りたくても帰れなくなってしまった。やはり「戦争」によって手を阻まれてしまったのである。朝鮮戦争である。特に印象に残ったのは、一度故郷である済州島に帰ったが、戦争で火の海となり、日本に再度密航で戻ったお話しであった。今は祖国に帰りたいたいという思いも薄れている一世がほとんどであったが、きっと当時は近くて遠い祖国であったことと、祖国分断という

悲劇で傷ついたことであろう。

でも一世の方々は心見知らぬ土地で苦しい生活を強いられながらも、強く生きぬいたと思う。戦後仕事がない中でも知恵を絞り、「やみ米」、「やみ焼酎」、「養豚」など、当時の憲兵、税務署の目をかいくくりながらも、雑草のように生きてきたその生き様が、やはり偉大であると思えた。

私たちが在日二世・三世・四世は、間違いなく過去の戦争の産物といえる。戦争があったからこうやって日本に生まれ育った。だからこそ過去の戦争の惨劇を私たちが忘れてはならないし、風化させてはならないと思う。今も在日一世の間では、高齢者給付金が支給されないが、広島・長崎の原爆投下による被災により、後遺症で苦しんでいる方々も大勢いる。その方々の戦後補償は未だ解決されていないが、戦後処理に終止符を打つためにも、私たち三世・四世世代が引き継ぎを上げていかなければならない。また一世の残したものをしっかりと引き継ぎ、次世代のためにも私たちが同胞社会をより豊かにしていくべきだとつくづく感じた。

李 秀南